

功績賞を授賞して



青木 楠 男 氏

5月26日、広島での土木学会総会の席上で、篠原会長から功績賞を賜受いたしました。

賞状には、土木工学ならびに土木事業の進展に多大の貢献をされたと書いてあります。これを読みますと気恥ずかしい気持ちでいっぱいになります。

明治26年7月23日生まれ。大正7年7月東京帝国大学土木工学科を卒業し、内務技師、東京帝国大学講師、内務省土木試験所長、早稲田大学教授等多くの役職に関係され、昭和41年11月土木士員会員に選ばれる。現在は、早稲田大学名誉教授、国士館大学教授。昭和16、17年土木学会常議員、29年会長、39年より本州四国連絡橋技術調査委員会委員長、昭和39年名誉会員に推荐される。現住所：東京都板橋区板橋 4-38-2

す。自分にとりましては思いもかけない過分のおほめの言葉であります。

どんな選考が行なわれたのか知りませんが、どなたかご推薦下さり、多数の委員の方々のご支持があって選ばれたことと推察いたします。

ここに皆様方のご厚情に対し心からお礼申し上げる次第であります。

いただいた金色の賞牌は書斎の飾り棚の上にさん然と輝いております。この榮譽を汚さないように、齢はすでに73を越え、残すところ少ない余生であります。なお土木界のために何かのお役に立つ機会をもちたいものと念願いたしております。



田 淵 寿 郎 氏

このたび功績賞を授与せられて誠に名誉なことに喜んでおります。私の授与せられたのは名古屋市戦災復興事業についてと存じますが、至てじみない仕事に対して賞められたということは珍しいことと存じます。すでにこの問題については中日新聞、朝日新聞等から賞を与えられております。私はこの仕事はどういって私一人でできるものでなく関係者上下一致して初めてできるものと信じ私はその代表であると考えて関係者一同と喜びを分ちております。

この仕事をするについては計画は今日というメトロポリタンエリアを考え名古屋はそのメトロポリスであるとして実施しました。また実施にあたっては横ニラミ主義すなわち復興事業は名古屋市全体に実施するのではなく全然戦災を受けない所

が復興に熱中のあまり取り残されては途中でこの方面から文句が出て事業の妨げとなる恐れがあるので常にこの方面も考えに入れて少しではあるが仕事をしてやるということである。また仕事の方法として派手な仕事は後まわし用地確保のごとき地味な仕事を初にやるということにして実施しましたが、相当批難もされましたが結局は喜ばれました。すべて事業をするには困難な部分を先に派手な部分を後にということは最も大切なことと思っておりましたが、今日その結果が認められたことになりましたので、嬉しさも一倍であります。

今日広域行政とか地域開発とかいうことがさかんに唱えられ、東京・近畿・中部各圏の研究がさかんになりましたが、名古屋復興のある程度の成功もこの広域の考えを取り入れたためと思います。また最近緑ということが論議せられて来ましたが、名古屋の計画では学園と公園は一つという言葉を用いて小学校には必ず隣に小公園を自属せしめましたが、学制が途中で変わったため今日必ずしも小学校に隣して公園はありませんが、とも角も緑の必要を考慮してその敷地を取っていただいたのが今日芽生えて来て緑が多くなって参りました。何と云っても広域とともに先を見越すということが第一と思います。



小松定夫氏・論文賞

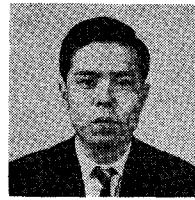
大正 11 年 6 月 9 日大阪市に生まる。市立都島工業学校（機械科）、旅順工科大学 予科をへて 21 年 9 月、京都大学工学部物理学科（旧航空）卒業。寛組、大阪府をへて大阪市立大学へ入る。29 年講師、34 年助教授、41 年 6 月より大阪大学教授として土木構造学第一講座を担当し現在に至る。36 年 12 月京都大学より工博の学位授与。39 年 9 月より 40 年 7

月にかけて米國コロンビア大学に留学し帰路ヨーロッパを視察。現住所：大阪府東淀川区山口町 1018

名門都島工業学校では機械を修め、大陸へ渡って旅順工大の予科へ進み、内地へ帰ってからは京都大学の応用物理学科を卒業、民間会社、大阪府の職員をへて大学生生活に入った小松さんの人生航路はまことに多彩なものといえよう。

学生時代から構造力学に興味をもち、土木構造物に生涯の夢を託する決心をし、大学へ戻るまでの期間も力学や数学の本を耽読することが一番幸福だった、という小松さんは、傍系の出身であるということをしきりに強調されたが、土木工学の使命目的、範囲などを考えるとやはり主流も傍系も存在し得ないのではあるまいか。

「土木工学界という偉大なコンクリートの中の一粒子の固い骨材でありうるものが生涯の願いです……」と生真面目に語る小松さんは、中井さんを始めとする多くの協



中井博氏・論文賞

昭和 10 年 12 月 14 日茨城県水海道市に生まる。滋賀大学付属中学校、県立膳所高等学校をへて昭和 34 年大阪市立大学理工学部土木科卒業、36 年大学院修士課程を終え助手、41 年より講師、現在にいたる。現住所：滋賀県大津市松本 1 の 2 の 1

力者とくに思師である小西教授（京大、現在滞米中）に喜んで頂けるのが何より嬉しい、という。

音楽とドライブが趣味という小松氏の今後の研究におけるハンドルさばきを大いに期待したい。

「学者というものは重い荷物を背負って荒野をさまよう旅人のようなもの」という学会誌にのった平井 敦氏の一文に大いに共鳴するという中井さんは、新進気鋭の独身講師である。「これと思ったことは徹底してやる」性格だそうだから、登山、ヨットなどの趣味も大いに凝ったものと推察する。橋梁工学という専門分野も非常に細分化されていく傾向があることに顧み、橋梁を通じてもう一度土木工学を広い立場で眺めてみたいという中井さんの抱負に注目し、核心をついた講義で一人でも多く応用力のきく学生を育てたいという言葉に拍手を送りたい。



佐藤吉彦氏・奨励賞

昭和 8 年 3 月 30 日、岩手県盛岡市に生まる。県立盛岡中学校併設中学校、県立盛岡高等学校をへて、昭和 30 年早稲田大学第一理工学部土木工学科卒業、東京大学大学院へ進み 32 年修士課程、35 年博士課程を修了。同年 10 月、東京大学より工博の学位授与。35 年 4 月日本国有鉄道に入社、中央鉄道学園、大阪鉄道管理局にて実習後、鉄道技術研究所

に入る。現在軌道研究室勤務。40 年 9 月～41 年 8 月までコロンビア大学工学部土木工学科および応用力学科に客員研究員として滞在。現住所：東京都武蔵野市緑町 2 丁目 4 番 2-101

職場、学会等で転開される佐藤さんの論陣は的確な論旨の積み重ねと、ときには辛辣とまでいえる意見で、他に例をみないほどである。早大から東大大学院を経て現在の職場・国鉄へと歩んだ足跡は将来の才能に加えて、日に日を重ねての努力の成果をして、注目される研究者としての地位を定めつつある。会誌懸賞論文募集に際し、一席で入賞そのプロフィールを一昨年の会誌に登載したのでご記憶の方もおられようが、やはり「うるさ型」の一方の雄として令名は高い。爾来、アメリカへ留学、より大きな世界を背に、新しい研究者としての訓練をされた。氏の帰国後の活躍に期待をかけた者、またどのように変わるかを興味をもって見守っている者等、常に注目

される人であることは他言を待たまい。帰国の直後はやや静かであったが、冬眠から醒めたようにまたいろいろな面でその活動が始まった昨今でのこの授賞は、当然ともいえるなりゆきでもあったようだ。

人としてこの世に生を受け、国と世界のために、また人類のためにその持ち得る才能を惜しむことなく注ぐことのできる幸せ——そんな言葉を背負い山通をゆく旅人を連想する近日の氏ではある。まだ若く、研究者としての卵であるかも知れないし、また今後の活動を予測するにはまだまだ未完かも知れない。理論に理論を重ねて出てくる答が、あまりにも大きな自然に対峙するときにはたして本当に正しいのか、今後の氏に課せられた大きな課題かも知れない。

東海道新幹線が完成したそのときから、わが国の鉄道工学は常に追われる立場に立つこととなった。武蔵野の昔影をわずかに残すフィールドに、恵まれた研究施設を持つ鉄道技術研究所、ここに籍のある氏とて、その重責は十分承知されておられよう。渡米前にもうけた長男、そして間もなく生まれてくるであろう二人目のお子さん、家庭的にも恵まれた氏の今後の活躍に十分注目してゆきたいと思う。



首藤 伸夫氏・奨励賞

昭和9年11月10日大分市大字駕野に生まる。大分郡東植田村村立中学、県立上野ヶ丘高等学校を経て32年3月東京大学工学部土木工学科卒業。建設省九州地建に勤務後、35年4月より土木研究所海岸研究室へ転勤。41年4月より中央大学助教授として現在に至る。昭和40年12月より6カ月間フランスへ留学。現住所：東京都立川市砂川町けやき台団地 10-505

「談歩しなければ得られぬものは、決して受け取るな」というダグ・ハマーショルドの言葉にも連なるかとも思われる「無理をしないこと、無理をおしつけないこと、無理をおしつけられたら拒絶すること」を身上とするこの若き学求は、外見からは想像することもできないような強い意志の持ち主と思われる。ややうつむき気味に音もなく歩く彼、度の強い眼鏡の下から光る温和なひかり、下手な詩を書く男の友情に見守られる彼、そしてときどき思い出したように見上げる眼は、何か遠い空の彼方に理想を求めて彷徨う求道者の受難の響きがある。

酒が好き、しかも酒をおいしく飲むことが好きという氏は、小説を愛し、落語を聞かれるのが楽しいとのこと。自己のペースを乱さない研究を終え、美盃を片手に

落語を聞く彼に、今後の飛躍を望みたい。四方を海に囲まれたわが国は、至る所にその勝景を有し、海や海岸にまつわる伝承も多い。海辺に打ち寄せる波は月の光の下には静かでも、嵐の日には無人の境をゆく。海岸工学、それは巨大な海のエネルギーと人との対話であり、その中で協和音を楽譜に写しとるのが、狩人・海岸工学者であろう。昭和32年3月に東大を卒業、建設省を経て中央大学へ移られたのが昭和41年。先生としての実歴はまだ2カ年ほどではあるが、チリ津波の調査に参加することによって、今回の授賞対象となった研究を始められたという氏の研究に対する考え方も、いかにもヒューマンなこの人らしい主影がある。

フランスへ留学される方の多い水屋さんの例にもれず、氏も約半年間留学された。在仏中の成果は何であらうか。食事を、そしてお酒を美味しくいただくことだけは承わったが、そのほかのことは聞きもらした。「どうやら一人前になれそうかな？」という受賞の感想の中にその回答が出てくるのであろう。一女の父として、また新進の学求としてのこれからの首藤さんの歩みに注目しよう。



柴田 徹氏・奨励賞

昭和7年2月9日、京都府綾部市に生まる。京都府立西舞鶴高等学校を経て、昭和25年京都大学へ入学。29年土木工学科卒業、大学院修士、博士課程を経て34年4月講師、35年3月助教授（防災研究所）、41年より交通土木工学科に移り現在にいたる。39年10月より40年12月までノルウエー王立土質工学研究所に留学。現住所：京都市伏見区桃山町伊賀 6

スケールが大きそうに思われたのでなんとなく土木工学を選んだという柴田さんであるが、ご本人の風ぼろ、しゃべり方、身体つきなど、なかなかスケールの大きそうな人物と見受けた。

同期生では榎木 亨氏（昭和35年度奨励賞受賞）、土屋義人氏（昭和37年度奨励賞受賞）につぐ三人目だとい、それぞれ専攻は異なるが刺激になったとのこと、そして大学院に入ったとき、指導教授から与えられたテーマを10年あまり忠実に追究しただけ……と感想を述べる態度が誠に談々として素直である。

研究の苦心という質問に答えて、残念ながら他の社会を知らないで苦心といえるかどうかかわからないが……と前置して、どうも対人関係がむずかしいと頭をかく。そして2年ばかり前に滞在していたオスローの研究所の自由な楽しさが忘れられないと眼を細める。しかしそこ

の所長でもあり、土質力学の大御所といわれるペーラム博士が「いままでに多くの外国人が研究していったが、ドクター柴田ほど強烈な印象を残していった人は少ない」と吹聴しているところをみると、相当に頑張られたのでは……と尋ねると「先方の政府から沢山のお金をもらえたので、のびのびと全力投球できましたからね」とこともなげにおっしゃる。この人なかなかの皮肉屋でもあるらしい。

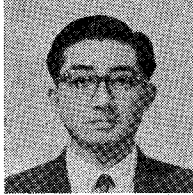
プレーは室の外を問わず何でも来いの多趣味な人で、お宅には優勝杯が飾ってある由、今回の受賞メダルは錦上さらに花を添えることであらう。お酒には眼がない方で、本数は聞きもらしたが、晩酌をやりながらナイター中継を見るのが楽しみだそうで、子供さんも2太郎1姫と巧みに左右に打ち分けた？とご本人は満足そうに笑う。

よき指導者や後輩に恵まれているのは有難いといながら研究上のレポーターをもっともっと上げたいという。土質力学という分野はまだ若いだけに多くの未開の分野が残されているのだから将来が楽しみである。「功を焦らず、独創で勝負すること」これが柴田さんが自分自身にいい聞かせ、かつ後輩へも与える言葉だそうである。



丸安隆和氏・吉田賞

大正4年1月8日福井県に生まれ。県立小浜中学校、第四高等学校理科甲類をへて昭和14年東京大学工学部土木工学科卒業、昭和16年京城帝国大学助教授、20年東京大学助教授、28年教授となり現在生産技術研究所勤務。国際会議3回出席。現住所：東京都文京区千石1-19-11

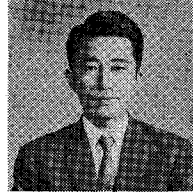


阪本好史氏・吉田賞

昭和7年3月6日北九州市小倉区に生まる。小倉中学校、小倉高等学校をへて昭和29年3月九州大学工学部土木工学科卒業。30年12月、九州大学助手、34年9月八幡化学工業(株)へ入社。39年3月九州工大非常勤講師を兼務、40年7月、東京大学生産技術研究所嘱託を兼務し現在に至る。現住所：北九州市小倉区5丁目67

小林、阪本さんのコンクリート畑での受賞はさておくと、丸安教授の吉田賞との組合せに奇異の念を覚えたのは筆者だけではない。最近の丸安教授の活躍の場は、どちらかといえば測量であると考えていただけに驚きの念を禁じ得ない。暇日丸安教授をお尋ねして先生のご専門はと伺きすると破顔一笑……十種競技だと即座に答えられるあたり、その実績と相まって、その歩いてきた道に対する十分な自信のほどが伺えて頼もしい。土木学会賞、東レ賞、吉田賞といろいろな賞にはもう不感性になっておられるはずなのに「教えを受けた吉田先生の賞をいただけるのは最高の喜び……」と素直に喜ばれた。丸安教授は東大生研に籍をおくかわら、御茶ノ水女子大学の講師をされて同輩をうらやませがらせたり、東大ロケット基地の建設に参画されたりする八面六臂のご活躍、いつまでも忘れない若き研究魂とともに、ご健闘を祈りたい。

小林さんは昭和33年運輸省技研在籍中にスカウトさ



小林一輔氏・吉田賞

昭和4年5月31日、に生まれ。茨城県立大田中学校、水戸高等学校理科をへて昭和29年3月東京大学工学部土木工学科を卒業、運輸省に入り運輸技術研究所港湾施設部に勤務。33年6月東京大学生産技術研究所第5部に入り38年8月助教授、現在にいたる。現住所：東京都足立区花畑町団住住宅49-404

れて東大生研に移ったが、当時生研におけるコンクリートの実験設備としては「ミキサと型わくとエアメーターぐらい……」のもので、専門書に至っては戦前のものでなかったそうである。このような状態から出発して、「大学の研究室として一応恥しくない内容」とととのえるまでには丸安教授のバックアップを得ながらも、やはり相当な苦労があったようだ。この間、今回受賞の対象となった高炉セメントの研究をはじめ、高張力異形鉄筋の研究、人工軽量骨材コンクリートの研究等を手がけてきているが、ただ馬車馬のように頑張っただけと回想し、今後は腰を捨てて、よい基礎的な研究に取組みたいと語っていた。数年来、週3日は研究所に泊り込んでいる。趣味は絵画鑑賞の由。

九州男子阪本氏も小林氏と同じ昭和は一桁生れ。九大から八幡化学へ入り、九州工大と生研にも籍をおく新しいタイプの研究者で、非常な勉強家である。信条としては着実に行なうことをあげておられるとおり、共同研究者が驚くほどの努力家であるという。土木の分野へ入られた動機として、工学部の全課目のうち、土木が最も不得手なものが少なかったといわれるあたり相当にユーモアも解される風流人とみた。鉄道、旅行を趣味とするあたりロマンチックでもある。きっと消えゆく蒸気機関車への感傷などをもつ一面も持っておられる人であろう。



松本嘉司氏・吉田賞

昭和4年2月20日生まれ。昭和25年東京高等師範学校理科一部数学科をへて、昭和28年3月東京大学土木工学科を卒業、ただちに国鉄入社。大阪工事区長、新幹線総局課長補佐、構造物設計事務所主任技師を歴任し、昭和41年より東京大学助教授。昭和33~34年フランス政府技術留学生として1年、昭和42年4月PCPV国際会議(ロンドン)に出席。現住所：東京都練馬区大泉学園町643

一見温和な研究者を想わせる松本さんには土木技術者としての強い意志と気はくがある。旧制高校時代に数学科に学び、大学の卒業論文で河川工学をまとめ卒業と同時に国鉄に入り、コンクリート工学・基礎構造の研究・設計をはじめ、東海道新幹線の高架橋等数多くの構造物の設計を経験してきた松本さんは現在は東京大学で交通工学の講座を担当されている。

今回の受賞論文「鉄道橋としての鉄筋コンクリート斜角げたの設計に関する研究」は国鉄時代に、限られた工期でより安全な耐久性の大きい高架橋をつくる必要性から研究をはじめたものであり、短い研究期間で研究結果

をまとめ実施設計に応用する等、完成までには相当の苦心があったことだろう。国鉄から大学に移ったいまは別の新しい研究「吊橋軌道」とりかかるとともに、学会では文献調査委員長として若い委員の意見を取りまとめ、また会誌編集委員、コンクリート委員会委員として活躍している。今回11年ぶりに改訂された「コンクリート標準示方書」では鉄筋編の幹事として河野・尾坂氏とともに条文の作成から解説のとりまとめに至るまで大いに努力された。数学から河川、コンクリート、基礎構造、交通工学と多くの分野にわたり幅広い学識と交流をもつ松本さんは国鉄時代にフランスに1年間留学し、この1月にはロンドンのPCPV会議に参加したり、研究論文がACI誌の巻頭論文に掲載されるなど国際的にもその成果が認められつつある。これからの研究には共同研究が必要であり、研究者は協調性が大事であるという松本さんは、家庭的にも3男1女と恵まれ、数多い友人とよい先輩にも恵まれており、今後は土木技術者の代表として斯界のためにより広く活躍されることを期待したい。